

〈資料篇〉 長崎唐蘭船交易覚書 : 法政大学図書館所蔵・翻刻(4・完)

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

70

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

1972-03-30

長崎唐蘭船交易覚書 第四回(完)

法政大学図書館所蔵

凡 例

- 一 各文書の間は二行あきに処理した。
- 一 適宜、句読点・返点・中黒点を附して判読の便を計った。
- 一 大和仮名は平仮名に改めた。
- 一 本文中、朱書してある箇所はゴチック活字を用いた。

(書題簽)

長崎唐蘭船交易覺書四

会所調役

年番町年寄

船番筆頭

吉村三六

其方儀、当七月十九日大風雨之節、俵物役所懸二付、同所

江相詰候ニ付、令ニ称美一候、

寅十一月三日

会所調役

年番町年寄

唐人屋敷塀外見廻懸り

船番

三原嘉次助

同見習

武井 是助

町使

竹内甚次平

三浦登五郎

其方共儀、当七月十九日大風雨之節、唐人屋敷江相詰候ニ付、令ニ称美一候

寅十一月三日

会所調役

年番年寄江

船番見習

大木甚三郎

町使見習

牧 宗四郎

其方共儀、当七月十九日大風雨之節は非番ニ而候得共、別紙之通堺奉行江懸合申来候間、書面之趣を以相糺、差支有無可ニ申聞一候、

寅十月廿五日

以ニ切紙ニ致ニ啓上ニ候、然者此度米価下直ニ付、世上ニ同難渋之趣、米沢山之時節ニ付、酒造休株是迄渡世不レ致候者ニ而も、勝手次第酒造可レ致、酒造株高不レ拘ニ仕入一致、相稼候之様、御触渡御座候ニ付、酒造人共は聊減石不レ致、増造致ニ出精ニ候様申渡、猶又、右ニ付、惣年寄共も酒造人共江精々為ニ申聞一候処、当地之儀は、間狭之土地ニ而、此上酒造余計之仕入致し候而も難レ捌、元多

法政史学 第二十四号

七一

分其表江積下り渡世いたし来候処、中興代銀為二登方一之節、当地糸荷廻船之船頭共、毎々等閑等二有之、或是不埒之取計共有之、自与積下も相減、造酒不捌二相成候間、已後其表積下シ候代銀之儀、相对相済候分ハ、当表唐物引請郷中手当銀を以落札、荷物津出シ様、証文代り銀之内江為替取組出来候ハ、前書危踏も無之、余計之仕入捌方宜三付而ハ、酒性合直段等も相励候様相成候趣を以、右為替取組願之義、酒造人共惣年寄迄申立候間、右之通取計遣度奉レ存候付、番割每當表様、証文代り銀差下候節、其表酒問屋江可請取酒代銀有之、前以引合相済候分を替取組度段、酒造人共願出候ハ、右酒造人とも為替証文為差出、其表江差下シ、在番宿老共、其表江酒問屋江取立上納銀高二相束、長崎会所江納方申付候儀二候間、兼而其表酒問屋共江右為替取組来候ハ、上納御定日限通、無相違二相渡候様、於三其御役所被二仰渡一御座候様仕度旨、別紙之通惣年寄願書差出候付、取調候処、其御役所ニおいて、右之段酒問屋共江被二仰渡被二下候ハ、惣年寄申立候邊、捌方目当ニいたし、御触之趣三付、追々増造可致儀ニも相聞候間、御差支も無之儀御座候ハ、宜御取計被二下候様致度存候、依之惣年寄共差出候願書并其表取引仕来候酒問屋名前書写共巻冊、致二進達二候、

右為可レ得御意、如此御座候、以上、

十月十日

矢部駿河守印

惣年寄共差出候書付 写

乍レ恐口上

一今度米価下直二付、世上一同難渋之趣、米沢山之時節故、酒造休株其外是迄渡世不仕ものニ而も、勝手次第酒造可仕、勿論酒造株高不レ拘仕入相稼候様御触書之趣、猶又右二付酒造人ともハ、聊減石不レ仕、酒造出精仕候様被二仰渡一候趣に付、右渡世之者共手広売買為レ仕、其外之もの共ハ仕入相始候様為二仕度一奉レ存候、依之私共仲ケ間之者共江酒造人共江精申聞候処、酒造屋共申出候は、一向不三取留事ニは御座候得共、増造之御触二付而は酒沢山ニ相成、先は不レ捌之道理ニ而、其上自今直段等も引下候年ハ、猶更不三相捌旁不三勘定ニ相当、却而余国ニ而は減石も可仕杯之風説も在之、元来当地之儀は場狭之土地ニ而、是迄之造酒ニ而事足御座候儀二付、此上余計之仕入仕候間も御当地ニ而ハ難レ捌、元江造酒多分年來長崎表江積下渡世仕候処、中興代銀為二登方一之節、御当地糸荷廻船之船頭共、毎々等閑二仕、あるひハ不埒之取計とも有之、元来蔵元手之者とも取続兼、追々長崎積も相減、又は相止候者等も御座候、長崎表之儀は繁花之土地ニ而、随分相捌候之儀御座候得共、右船頭共不束江積下候儀危踏、商売向手狭相成、兼而歎數奉レ存罷在候之処、此度難レ有被二仰出二候付而は、一同相励増石可仕儀、右二付而は土地而已ニ而ハ難レ捌御座候間、何卒長崎積之儀、此上相励相稼申度、依之甚奉二恐入一御願ニハ御座候得共、長崎

表江積下候酒代銀之儀、唐・紅毛荷物入札商人上納銀・郷方唐物手当銀之内、御当地唐物問屋共江貨渡相成、長崎下シニ相成候銀子と、同所酒問屋共、当地酒造屋共江可差登酒代銀、右問屋江引合相濟候分、酒造屋とも為替之儀申出候節、取組相成候ハ、船頭不埒も出来不仕。一同無危踏進而長崎積專一仕、余計之仕入捌方、宜差支無御座、且は下シ酒余計相成候之三付而ハ、酒性合是迄ハ我ニ勵合候様相成、長崎表ニ而も乍恐勝手之筋ニも可相成載奉存候付、為替取組方之儀、御願申上異度、年行司共願出候、私共も何分被仰渡候通、増石出精仕候様申達候得共、前文之通、今度之御触之御趣意に付、諸国増石出来自直段引下ケ不捌之处を危踏候哉、却而米穀相場逆も引下ケ候風聞も御座候程之儀、何分捌口專一抱居候旨、長崎表江余計ニ売捌仕候上、代銀は番割度毎長崎表江塚根証文代り銀下シ方在之節、当地酒造屋共之内、彼表酒問屋、可請取酒代銀有之、前以引合相濟分、為替取組度願出候は、唐物問屋江貨渡銀之内、酒造屋共江相渡置証文為差出、右為替証文長崎表江差下候ハ、在番糸年寄取立之上納高相束、長崎会所江納方申付候儀ニ付、彼表酒問屋ともへ右為替取組来候分、御定日限通、無相違相渡候様、兼而被仰付之置被下候様、彼御表御奉行所江御掛合被成下、何卒願之通被仰付候は、右之目当を以、格別ニ急度増石可仕と奉存候、当年之处は利益ニ不拘増石は可仕候得とも、何分前文之趣、御勘考不被成下候江は、難ニ取続ニ奉存候間、何卒願之通、御許容被成下候は、御触御趣意通出精増石可仕旨、一同申居候之旨、此段乍恐私

共御願奉申上候、以上、
文化三年寅十月

奉行所宛

長崎表酒問屋

長崎本古川町

菱屋 由次郎

同東浜町

木綿屋貞七郎

同西浜ノ町

今村 源藏

右之外、少々宛引請候問屋も在之候得共、先多分取捌仕候分、右三軒ニ御座候旨、住吉講年行司共申出候、以上、

寅十月

月番惣年寄

大和屋 理兵衛

高三七郎右衛門印

年番糸年寄

細屋又右衛門

会所調役

年番町年寄江

会所請託役

浅右衛門悱

太田宇一郎

其方儀、父願之通、請託役見習申付候入、念可相動候、

寅十月廿八日

手頭

仙台俵物、去ル亥年、同酉年分煎海鼠・丸干鮑領内出帆届書、松平政千代家来江戸表江差出候由ニ而到来ニ付、写相渡候事、

十一月二日

長崎俵物、去ル亥ノ年分領内出産之海煎鼠千百貳拾五斤、此丸数九丸、酉ノ年分丸干鮑百貳拾五斤、此丸数壹丸本節、北方氣仙沼源之助船八幡丸冲船頭三之丞乗江積入、亥ノ年分煎海鼠千貳百五拾斤、此丸数拾丸、同郡同所孫兵衛船金比羅丸冲合船頭弥兵衛乗江積入、右式艘当六月十一日

同浦出帆之段、国元役人共為申登候間、前冬之趣長崎御奉行所江申上候間、此段申上候 以上、

九月廿九日

松平政千代内

佐藤半左衛門印

被申立候、乍然其儀差支候ハ、去年来之振合ニて樟腦代之内前渡致遣候歟、兩様之内被申立候得とも、当年手当として銀三拾貳貫目程、先頃相渡候上は、猶又別段手当之儀、容易ニ難及沙汰候、併追被申立候之趣、無余儀相聞候間、去年来之振合を以、樟腦代之内前渡之儀、得与取調被申立候ハ、其筋相糺、猶其節可相達候、

右之通、薩州聞役上野善兵衛江申渡候間、得其意会所之もの江も可申聞置候、

寅十月八日

会所調役

年番町年寄

会所吟味役

銀拾枚

河野伴左衛門

其方儀、去丑年会所勘定帳仕上掛り、出精相勤候ニ付、褒美為取之候、

寅十月十日

錢五百文ツム

溜番五人

右之者共、当秋出帆唐船湊沖滯船中、懸り乙名共召連海陸手を分ケ、昼夜廻り方致し、格別骨折相勤候旨ニ付、褒美為レ取之候間、可ニ申渡候

寅十月十日

会所調役

年番町年寄

盜賊方掛乙名

岸 駒太郎

田口惣兵衛

銀老枚宛

其方共儀、当秋出帆唐船湊沖滯船中、海陸相廻り骨折相勤

候ニ付、褒美為レ取之候、

寅十月十日

会所吟味役助

年番町年寄

江

盛 善右衛門

其方儀、来春大坂銅座詰として差遣候間、当時相詰居候中山利十郎与可令ニ交代候、銅座之儀ニ付而は兼而申渡置候通諸事入念、来ル辰年迄可ニ相勤候、

寅十月十二日

会所調役

年番町年寄

へ

盜賊方手附筆者

村田昌藏

同日行使

金百疋

定右衛門

円 藏

次郎 左

宅 平

弥 藏

仲右衛門

会所請払役並

年番町年寄

江

会所調役

大津山利藤太

其方儀、来春大坂銅座詰として差遣候間、当時相詰居候福村官兵衛与可令ニ交代候、銅座之儀ニ付而は兼而申渡置候通諸事入念、来ル辰年迄可ニ相勤候、

銀式両宛

長崎唐蘭船交易覺書

四

七四

寅十月十二日

七五

会所調役

年番町年寄 江

町使定乗

池嶋左太夫

其方儀、岡田清七牢屋取締懸り申付置候処、此節阿蘭陀船
沖見送出勤ニ付、右代り当分助勤申付候、入念可ニ相勤候、

寅十月十二日

会所調役

年番町年寄

都而喧嘩口論等御法度之儀は前以御触も有レ之事ニ候処、
近來心得違之者有レ之、聊之義を申成口論におよひ、或は
多人数申合及ニ打擲ニ候義も有レ之哉ニ相聞、甚以不束之至
候、畢竟末々之もの共かさつより事起り、不法狼籍等ニお
よひ候始末ニ至、其次第礼明之上、夫々御仕置申付事ニ候
得共、一旦之主意を以、前後之弁なく手疵等為レ負候類誠
愚昧之所行、不便之事ニ候条、一統申合末々之者共心得違
無レ之様嚴敷申論、万端相慎候様可ニ申渡ニ候、若不ニ相用
もの於レ有之は早速可ニ申出ニ候、
右之趣、寛政六寅年五月申渡置候、近來心得違之者有レ之

哉ニ相聞候、猶又其方共々前書之趣惣町乙名とも江申渡、
末々まで教解行届候様可ニ申渡ニ候、

寅十月十三日

会所調役

年番町年寄

近年米価下直ニ而、世上一同難儀之趣ニ相聞候、右躰米穀
沢山之時節ニ付、諸国酒造人共は不レ及申、休株之者其外
是迄渡世ニ不レ仕ものニ而も勝手次第酒造渡世可ニ致候、勿
論酒造高是迄之定高ニ拘はらず仕入相稼可ニ申候、
右之通、御料・私領・寺社領共不レ洩様可ニ触知もの也、

九月

右之通、江戸へ申來候間、得ニ其意ニ可ニ相触ニ候、

寅十月十三日

会所調役

年番町年寄

今籠町乙名

茂兵衛治作

浅井宇十郎

其方儀、父願之通、役場見習申付、式日八朔礼差免候、諸
事心懸出精可ニ致候、

寅十月十四日

会所調役

年番町年寄 江

豊田源次左衛門

右は今般手附出役被_レ仰付_二候間、得_二其意_一向_レ江可_二達直_一候、

寅十月十七日

銀老枚宛

会所調役

年番町年寄 江

岩清谷宗五郎

其方儀、当寅年番津田又十郎代り申付候間、入念可_二相勤_一候、

寅十月十八日

薬師寺久作衛門 江

成田安知次

別府真左衛門

本莊貞太郎

城善之進

星野元次郎

佐々木一次

国木原寿平

松浦新吉

吉村源助

三浦安知之助

大木甚三郎

加藤安之助

牧民四郎

尾上小十郎

武田太久助

児嶋千次郎

山本段右衛門

福井国次

池辺加文次

今田兵太

吉田正右衛門

磯部八郎

加藤民五郎

松下文左衛門

津田熊三郎

武井是助

竹迫千左衛門

竹田時次

小川吉之助

服部左十郎
武井専助

幸四郎倅

大富政太郎

其方共儀、炮術見分之節、致皆中「常々出精之義と一段之事」候、仍褒美為「取」之候

右無給ニ而役場見習申付候、右之通可「被」申渡「候」、

寅十月廿日

寅十月廿一日

薬師寺久左衛門

江

会所調役

江

種田平四郎

年番町年寄

成田嘉平次

村田林右衛門

児嶋唯助

大河内久兵衛

今井右平

倉田諸助

池辺嘉文次

右之通、当年分紅毛方奉行調物定銀高之内を以、臨時調物有「之」候様相達候間、薬種・荒もの類を以、調「之」積可「取計」旨、会所のものへ可「申達」候事、

金貳百疋宛

寅十月廿三日

三浦藤次郎

吉村三六

会所調役

松下文左衛門

年番町年寄

池嶋左大夫

高嶋作兵衛

塚原宗助

船改方乙名

服部寛左衛門

金貳百疋宛

浅井茂藤次

此度炮術令「見分」处、其方共儀、常々出精世話行届候義と相見一段之事候、仍褒美為「取」之候、

寅十月廿日

境作四郎

長崎会所筆者

其方共儀、当五月長崎会所より唐朱盜取候八百屋町乙五郎事幸助東上町長五郎事兵助捕方并糺方屋夜骨折、猶また内探等格別出精相勤候ニ付、褒美為「取」之候、

寅十月廿三日

会所調役

江

年番町年寄

高嶋作兵衛

船改方乙名

浅井茂藤次

境作四郎

銀耆枚宛

其方共義、当秋出帆唐船沖滞船中、唐人とも上陸取締として海陸相廻り、夜分迄格別出精相勤候ニ付、褒美為レ取レ之候、

寅十月廿三日

大坂銅座筆者

松並理助

倅

万太郎

銀式両宛

右理助儀、病氣ニ付、願之通暇申渡、倅万太郎へ受用高耆貫三百五拾目・扶持銀百目・俵物方御手当銀百五拾目都合耆貫六百目ニ而、筆者跡抱申付候、右之通、可レ被ニ申渡ニ候、

寅十月廿三日

盜賊方懸乙名

会所調役

江

年番町年寄

岸駒太郎

田口惣兵衛

銀式枚ツム

其方共義、先達而長崎会所紛失之品、盜賊手筋内探いたし、東上町源次郎・幸之助召捕、猶又一件懸合之者共札方等、数日格別骨折相勤候ニ付、褒美為レ取レ之候、

寅十月廿四日

年番町年寄

江

高嶋作兵衛

船改方懸乙名附筆者

限清八郎

羽田勝右衛門

同日行使

与重

右平

文藏

禪右衛門

吟左衛門

次八

小番次人

錢五百文宛

長崎唐蘭船交易覚書

四

七八

右之もの共、当秋出帆唐船滞船中唐人共上陸、為取締_二掛り乙名共召連、海陸相廻り夜分迄格別骨折相勤候旨、

右之者共、当秋天草詰御普請役交代之節、別而骨折候旨_ニ付、褒美為取_レ之候間、可_ニ申渡_一候、

寅十月

銀三匁宛

右 平
文 藏
禪右衛門

錢五百文宛

小 番 式 人

右之者共、当五月長崎会所_ル唐朱盜取候八百屋町乙五郎事幸助東上町長五郎事兵助捕方并糺方等、晝夜骨折、猶又内探等之儀_ニ付而は、格別出精相勤候旨、
右之通、褒美為取_レ之候間、可_ニ申渡_一候、

寅十月

金三百匁

盜賊方手附筆者

村田昌藏

同日行使

金貳百匁宛

年番町年寄 _江

岩原用達附筆者

金百匁宛

河合貞藏

渋谷新左衛門

同小使

寅十月廿四日

右之者共、先達而長崎会所紛失之品、盜人手筋内探いたし、猶又召捕糺方之節、数日格別骨折相勤候旨_ニ付、褒美為取_レ之候間、可_ニ申渡_一候、

銀貳両宛

仲 兵 衛
伊 三 郎
市 藏
卯 三 郎
己 之 助

会所調役

年番町年寄 _江

中紺屋町乙名

青野半兵衛

其方儀、津田又十郎代り測量御用天文方当地罷越候砌、滯留中諸事取計懸申付候、入念可ニ相勤一候、

寅十月廿四日

会所調役

年番町年寄 江

会所請込役並

作七郎養子

山本作太郎

其方儀、養父跡相統会所請込役並申付、受用銀

会所筆者

甘濃次郎左衛門

香月周吉

右原三平暇明諸商売方元帳認方懸申付、定式御手当銀三百目兩人江、割合老人百五拾目宛、被ニ下置候、弥出精可ニ相勤一候事

寅十月五日於会所後藤惣太郎殿被ニ御申渡一

手頭

一黒緞子 壹反

長崎唐蘭船交易覚書 四

一白繻子 壹卷
右は一橋殿御頼之儀申来候ニ付、取調調懸可レ致候事、

寅十月五日

会所調役

年番町年寄 江

鹿皮目利

藤藏養子

寺田藤太郎

其方儀、父跡鹿皮目利申付、受用銀如レ父一_ニ時之_ニ為レ取レ之候、入念可ニ相勤一候

寅十月六日

会所調役

年番町年寄 江

高嶋四郎兵衛

高木清十郎

年番乙名

津田又十郎

其方儀、京与右衛門跡、川浚方掛申付候、入念可ニ相勤一候、

寅十月八日

其方共儀、当七月十九日大風雨之節、唐人屋敷竹矢来風損
之場所、仮繕出来致候迄、屋夜廻り方格別骨折相勤候ニ付、
褒美為レ取レ之候、

寅十一月三日

会所調役

年番町年寄へ

唐人番触頭

佐々木吉兵衛

唐人番

国木原与一右衛門

倉田諸助

松浦百助

会所調役

年番町年寄江

御菓子御用水砂糖去々子年去丑年参着、残当寅年分共、式

万式千六百九拾四斤三合未ニ相廻、右ニ付御囲高少、御差

支相成、当十一月中ニは御遣ひ切可ニ相成候間、十二月よ

りは御買上ニ相成候段申来候間、唐船持渡次第早ニ可ニ相

廻候、

寅十一月二日

銀七枚宛

高木清右衛門

葉師寺又三郎

其方共儀、王氏船主申立候和錫商法来卯年分、当夏入津寅
八番船ハ持渡元代式拾式貫目分之荷物商売相遂、右取計方
出精相勤候ニ付、褒美遣レ之候、

寅十一月三日

会所調役

年番町年寄江

葉師寺又三郎

会所吟味役

野口長右衛門

同助格

山脇久平次

唐大通事

穎川四郎太

同小通事

吉嶋左十郎

銀三枚宛

同並

柳屋新兵衛

其方共儀、王氏船主申立候和錫商法来卯年分、当夏入津寅八

番船ヲ持渡元代貳拾貳貫目之荷物商売相遂、右ニ付而は唐
方懸合、代りもの渡方等出精相勤候ニ付、褒美為レ取レ之候、
寅十一月三日

会所調役

年番町年寄

薬師寺又三郎

唐小通事末席

中山伊右衛門

同稽古通事

林甚八郎

其方共儀、王氏船主申立候和錫商法来卯年分、当夏入津寅
八番船ヲ持渡元代貳拾貳貫目之荷物商売相遂、右取計方手
伝出精相勤候ニ付褒美為レ取レ之候、

寅十一月三日

会所調役

年番町年寄

薬師寺又三郎

江

元普請方立合乙名

高石恒次郎

普請方立合乙名

同

田中七三郎

長江啓右衛門

会所普請吟味懸り

高橋登八郎

会所普請吟味懸り

三輪与一郎

同

山口恒助

普請方役頭取

嶋谷全左衛門

同

門岡宗助

普請方役

若杉吉兵衛

同

初村駒百

同

佐々木喜三郎

同見習

門岡友太郎

其方共儀、当七月十九日大風雨之節、諸場取江出役いたし
出精相勤候ニ付、褒美為レ取レ之候、

寅十一月三日

金百疋宛

村井吉太夫

同助

会所調役

年番町年寄

久松善兵衛

旅人改方懸乙名

銀毫枚宛

野口善作

其方共儀、当秋出帆唐船先乗^ル沖出松迄、湊内并近浦^ニ相廻り、昼夜格別骨折出精相勤候^ニ付、褒美為^レ取^レ之候、

寅十一月三日

寅十一月三日

会所調役

年番町年寄

御役所附

松本忠次

吉岡十左衛門

野口京太夫

竹内弥十郎

鶴田形右衛門

太田忠左衛門

成田郡右衛門

大木常次

井原陽右衛門

其方共儀、当七月十九日大風雨之節、出嶋唐人屋敷并唐船居場、其外所^ニ相廻出精相勤候^ニ付、褒美為^レ取^レ之候、右之通、申渡候間、可^レ得^ニ其意^一候

寅十一月三日

会所調役

年番年寄

御役所附触頭

伴与一兵衛

牧樽平次

金貳百疋宛
其方共儀、当七月十九日大風雨之節、所^ニ見廻骨折相勤候^ニ付、褒美為^レ取^レ之候、

右之通、申渡候間、可^レ得^ニ其意^一候、

寅十一月三日

永左衛門倅

品川作十郎

右父永左衛門願之通、見習被_レ仰付、式日御礼被_レ為_二成_一

御免_一候事、

寅十一月十七日

会所調役

年番町年寄、

船番

松下文左衛門

津田喜代次

年番町年寄、
江

金百疋宛

町使

矢次和三郎

杉山三四郎

小藤太倅

打橋嘉門太

瀬崎御藏預頭取

吟味不行届、不束之者差出候事起り候間、以来日雇水主
方共格別ニ致_二吟味_一、不束之もの不_二差出_一様可_レ致候、
一荷渡等之節、商人共日雇之義も、人柄相撰、不束之もの差
出申間敷候、

一右之節、致_二出役_一候役々之儀も、此上、猶又嚴重ニ相改、
聊も不束之筋及_二見聞_一候ハム、召捕候様可_レ致候、

右之趣、享和元酉年申渡有_レ之處、猶又不_二相弛_一様其方共
令_二承知_一、向々江急度可_二申渡_一候、

寅十一月十六日

右之通、高木佐右衛門江申渡候間、可_レ得_二其意_一候、
寅十一月十七日

会所調役

年番町年寄、
江

唐通事目附

四郎右衛門倅

唐稽古通事

御備銀貸付方手伝役頭取

長崎唐蘭船交易覚書 四

八四

神代利十郎

其方儀、兼々心懸宜出精相勤候ニ付、小通事末席申付候、諸事入念可ニ相勤ニ候、

寅十一月十五日

呂宋鹿皮目利

会所調役
年番町年寄
月番町年寄

源太郎養子

寺田駒吉

手頭

当秋致交代ニ候支配勘定内藤兵右衛門御普請役林元左衛門持越候唐金銀・紅毛銀錢大坂着之上、銅座人江相渡、銅座人より之請取書差越候間、則相渡候、尤道中勘定帳は追而銅座ニ会所迄差越候旨申来候間、心得迄ニ申渡置候事、

寅十一月十五日

船番

年番町年寄江

津田熊三郎

会所調役

年番町年寄
へ

唐内通事小頭手代り

彭城金十郎

其方儀、兼而精勤致し、一体心懸宜數方端事馴候趣相聞候ニ付、其身一代、唐年行司申付、為ニ手当ニ一ヶ年銀五百目宛為レ取レ之候、弥出精可ニ相勤ニ候、

寅十一月十八日

御役所附

会所調役
年番町年寄
へ

吉岡十左衛門

吉村農右衛門

其方共儀、外加役懸追々申付候ニ付、是迄相勤候使懸り

其方儀、天草郡牛深湊御番所詰吉村茂平太病氣ニ付、右為レ代差遣候間、入念可ニ相勤ニ候、

寅十一月廿日

は差免候、尤檢使懸り出精相勤候事故、為_二褒美_一銀老枚宛被_レ取_レ之候、

右之通、申渡候間、可_レ得_二其意_一候、

寅十一月廿一日

会所調役

年番町年寄

向井元仲儀、祖父代_レ不如意_ニ而借銀等多、家内相統方も不束_ニ而新借等相増、聖廟・講堂・門々・書藏并居宅修復行届兼、次第_ニ大破_ニおよび候_ニ付、普請積致候処、過分之入用高_ニ相成、難_レ及_二自力_一_ニ付、唐船_レ差贈候弊礼砂糖松之内、貳貫目宛貳拾_レ年分銀高四拾貫目前渡之義、難_ニ相願_一と寛政四子年も此節之通無余儀願差出、修復料として銀拾八貫目拝借申付候処、其節之修復致_レ方如何有_レ之候哉、尤其後風損出水等_ニ而破損も有_レ之趣申立候得とも、拝借致_レ候詮も無_レ之様相聞候間、此度願之趣及_二沙汰_一かたき筋_ニ候得共、聖廟・講堂・門々・書藏之義は居宅共沢違、場所柄之義_ニ付、格別之義を以修復入用銀拝借可_ニ申付_一候間、先右仕様入用積銀高等取調差出候様可_レ被_ニ申渡_一候、拝借銀高之義は追而可_ニ申渡_一候、尤此度修復致_レ候_ニ付而は、為_二取締_一目論見_レ皆出来迄、相応之役柄之もの懸_レ可_ニ申付_一候間、名前等之義、取調可_レ被_ニ申聞_一候、且又聖廟向修復之外、元仲居宅并借財片付方之義、申立候

長崎唐蘭船交易覚書 四

得共、右は寛政九巳年・同十一未年兩度_ニ救銀拾四貫目余拝借申付、右之甘きを以取続方可_レ致_レ処、其詮も無_レ之不_ニ心懸_一之至候、居宅修復借財片付方之義は、聖廟向修復とも沢違ひ候_ニ付、一同拝借之義は相成かたく候、乍_レ然申立之趣無_ニ余義_一筋_ニ付、救銀拝借之義、別段願立候ハ、返納方等差支有無相糺、及_二沙汰_一候間、其段可_レ被_ニ申渡_一候、右之通、高木作右衛門_ニ申渡候間、為_二心得_一及_レ達候、

寅十一月廿一日

会所調役

年番町年寄

琉球国より薩州_ニ為_二差登_一、於_二京都_一売捌候紗綾・白糸直段下落いたし、難_ニ引合_一由_ニ付、右品替として、蘇木七万斤・鼈甲五千斤・繭五千斤大坂表_ニ為_二差登_一売捌度段、去々子年松平薩摩守家来申立候処、右三品は当地_ニにおいて利潤も有_レ之品_ニ付、薩州より多分_ニ相廻_一り候而は、商売之障_ニも可_レ成事_ニはいへ共、品替之義無_レ之候而は、薩州_ニおいても難儀之筋_ニも有、三貫目為_二取_一之候、入念可_ニ相勤_一候

寅十月廿四日